ブレイバーズ

神殿　真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレイバーズ

【Ｎコード】
Ｎ４５８５Ｘ

【作者名】
神殿　真

【あらすじ】
一人の人間の身に起こったファンタジー。
一人の人間が選ばれたために世界は大きく変わる。
ファンタジックな力で戦う、血生臭い戦争。
それを終わらせたのは三人の勇者だった。
戦争終結から約百年後。
世界は原型を留めないほど変わった。
そんな世界で生まれた新たな勇者達のお話。

高校生になってもいまだに中二病の治らない作者のつたない文章をご覧いただけたら幸いです。
少し読みづらいかもしれませんが作風だと思っていただけたら嬉しいです。

プロローグ（前書き）

少し説明が多いかもしれませんがだいぶ抑えてあります。

プロローグ

その光景は異様だった。

何百、何千という数の人間達がさながら蟻のように固まり、前方に佇む存在に視線を集めている。

視線だけではない、その手に携(たずさ)えた武器を集団の前列は標準を向けている。

武器、といってもただの拳銃でもなければ、スナイパー、バズーカでもなく、軍事関係者だけが知りえているような重火器でもない。

しいて言うのであれば、それは人間の肉体そのものと大気中に存在する不可視のエネルギー。肉体を媒介とし、空気中のエネルギーを循環させ、あらゆる現象を引き起こせるようになった人間は既に存在そのものが重火器と化している。

それが蟻と例えられるほどの数。弾薬庫そのものを戦場に持ち運んでいるような状態である。

にもかかわらず、蟻と例えられるほどの軍団が見つめるのはたったの三人だけ。ましてやその中の一人は戦意すらない。それは諦めではないことだけは直感的に理解出来たし、そう認識させるように存在していた。

その理由は波のように人間達が動き出したことで明らかになる。

軍隊の前列に立つ人間達が掌を前方に見せつけるように差し出す。そして次の瞬間には、それぞれの掌から爆炎や　圧縮された水、雷撃が放たれた。

色とりどりの砲弾は綺麗に写るが、その一つ一つに人間を肉塊に変えるほどの威力が秘められている。それを見て綺麗だと思う余裕は普通ない。そもそもこの情況自体普通ではない。

そんな情況で三人はさらに普通ではない存在だった。

片手を払う。目の前に集(たか)るハエを払うような動作で、全ての能力による砲弾が爆発もせずに消滅した。

三人の内、二人が敵の大群に一歩踏み込む。それだけで数千メートルという距離が無くなった。
そこからは、ただ一方的だった。
蟻と例えられほどの圧倒的物量数を持つ人間達が、見えない衝撃波に吹き飛ばされ、自身の影から出現する影そのものに襲われ、蹂躙されていく。攻撃した前列だけでなく、後ろで即座に次の攻撃しようと待機していた人間達にも襲いかかる一撃一撃に早くも統率は崩れた。正体不明の能力に人間達は圧倒的とは程遠いほどの力の差を感じざる得なくなった。
実際、三人にとって能力を持つ者程度の集まりは蟻と大差のない力しかないのだろう。むしろ踏み潰したら雨が降るなどの迷信がないだけにより弱い存在になり下がっている可能性すらある。
そこまでの圧倒的な差を見せつけられた人間達は口ぐちに独特の言語で叫び、逃げまどう。
『悪魔だ』『勝てるはずがない』『早く逃げろ』
そしてその中の一人はこう叫んだ。
『勇者が来た』
と。
それは決して味方として来てくれたわけじゃない。むしろその真逆に位置する三人。自分達を蹂躙する厄災。核爆弾すら消し飛ばし、無効化した存在。古くから伝わる勇者の伝説に核爆弾を放射能ごと消し飛ばすような伝説などは無く、そもそも人間を蹂躙したりはしない。だが、人を超えた存在ではあった。
勇者と呼ばれた三人の中の一人。つららのように腰まで届く白い髪、まるで童話の中に出てくる王子様のように白い衣装、そしてあらゆる存在(ぶっしつ)を消し飛ばす衝撃波を放つ勇者(ばけもの)は、嘲笑うかのように人間達の言葉に反応した。
「正解！　俺は白い悪魔なんかじゃないぜ？　俺達はちっぽけな島国を、大陸ほとんど支配した巨大な軍事国家から守る勇者様さ。理解したならさっさと消えな！」

人間達とは全く違う言語で放たれたその台詞をそもそも戦っている人間すらほとんどいないこの状況で理解できたものはいないだろう。

三人――実質二人の勇者対数え切れないほどの軍隊は、三人によってまるで意図されたかのように三分程度で三人の勇者の勝利に終わった。

残った一人の元に戻る二人。勝利した余韻はない。そもそも戦いと呼べるかわからない争いに勝利という概念すらない。

原初の勇者。現在、そう呼ばれる三人は会話することなく帰路に着く。

さっきまでの対戦で荒れた土地からは真逆の道を行く途中、あの白い勇者が突然立ち止り、こちらを振り返る。そして口を開き、なにかを伝えようとした。

けれど、そのほとんどが聞き取れない。きっと大切なことを言っているはずなのに。勇者のお言葉なんてテレビでご高説している総理大臣の言葉よりずっと価値があるはずなのに。

結局ほとんど聞き取れず、ただ締めくくったであろう最後の言葉だけが耳にまで届いた。

「あし……きっ……い、…で……だから頑張れよ」

その声援だけが聞こえて、視界も暗くなり、勇者たちの姿は見えなくなった。

同時に夕立蓮土は夢から目を覚ました。

陽射しはまだやわらかく、早朝の気配を残している。

しっかりと思い出せるほどに鮮明な夢を見たにも関わらず、頭は冴えており、体が汗ばんでいない。

さっきの夢が悪夢なのか、それともただの夢なのかはわからない。夢は悪夢かそうでないかの違いしか文字にはない。

たださっきの夢は正夢であることだけは、はっきりしている。

百年前に突如現れた超能力者とそれらを束ねるとある軍事国家。

異常な力を使用した国に他の国は瞬く間に飲み込まれたにも関わらず、島国の小国がたった三人の戦力で勝利した戦争。勇者が初めて世界で活躍した戦い。

さっきの夢は学校で見せられた映像と寸分違わず同じだった。

最後の言葉がほとんど聞き取れなかったのも、である。

原初の勇者による声援を、蓮土はまるでお前はなにが欲しいんだ？　と聞かれたときのようだと感じていた。

どんなことも許してくれる両親か、どんなことも伝えあえる友人か、どんなことでも出来るほどのお金か、世界中の人間からの愛か、お前はなにが欲しいんだ？　と聞かれたときのように喜びと同時に少しの恐怖を覚えるような感覚。

その質問にどう答えるだろう。捻くれた人間ならさっきの全てを叶えられるほどの最高の知能が欲しいとか言えるのかもしれないけど少なくとも自分にそんなことは言えない。

そんなお願いはおこがましいと思う気持ちがあると同時に、裏がありそうな気がしてしまうのだ。叶うかわりになにか大切なものを失う、例えるなら脳のかわりに肉体が失われるとか、そういったように。勇者の言葉もこれからの子供達に送った、ただの応援メッセージではないように感じたのだ。

それは極めて東に位置する島国からの出身者らしい消極的な考え方なのかもしれないけれど、そういった考えが出来るからこそ奥ゆかしい文化が生まれたのだと思うと一概に否定も出来ない。

それは生き方に正解がないからなのだろうけれど、間違いもない。

そんな思考のループに比例するかのように目の前が回りだした。

結局、蓮土の答えは頭を使いすぎるのは良くないという結果に達したようだ。

今日も学校はある。いつの時代でも学舎（まなびや）は必ずあるものだ。需要と供給に関わりなく必ず。

気持ちの良い朝を濁されたような気分になりながら着替えを始め、自分以外に誰もいない家で朝の食事を採り、いつも通りに学校に向

かい始める。
そんな日常に飽きを感じ始めた十歳の少年だった。

なぜ学校があるのか、そこか「レッンドォー！」「ラリアットぉガハッ！」
蓮土の思考を刈り取るかのように駆け寄ってきた同い年ほどの金髪少年の腕の関節部分が首筋にジャストミートする。完全に気を緩めていたところに、完ぺきに入った金髪少年のラリアットと呼ばれるプロレス技の勢いで、五メートルほど吹き飛ばされる。
ちなみに蓮土の語ろうとしていたことは『なぜ学校があるのか、そこから話を始めよう』である。一人で誰に語るのかは謎だが、答えの無いことを思考し、自らの答えを当てはめるのが少年の癖であり趣味だった。
蓮土は吹き飛ばされた衝撃と今までの空気の違いによる高低差に軽くない目眩を覚えながら立ち上がり、空気を総入れ替えした張本人に駆け寄り襟を掴む。
「雰囲気ブチ壊しだろうがぁ！」
「わりぃわりぃ、俺のせいじゃないんだ」
「嘘が甚だしい！？」
「明るい方が良いじゃねえか。盛り上げようとしただけだよ」
「どこのプロレスラーだよ、お前……」
「そもそもあんな深いこと考えられる小学生なんていないって」
「小学生がラリアットで人間吹き飛ばす方が信じられないと思うんですけど」
結局、どっちがおかしいのかと言えばどちらもおかしくはない。
齢十歳であろうといくらでも哲学的に考えるだろうし、同じ体格程度の人間なら子供が子供を吹き飛ばすのも決しておかしくはない。
現在の世界なら、決しておかしくはない。
始まりこそたったの三人だったが、戦争後の『勇者の子供の誕生日』、通称ブレイバース・デイズと呼ばれる一年間で何百人という

単位で増え、さらにその勇者たちの知識をコンピュータに記録（コピー）し同じ脳波を持つ人間に貼り付け（ペースト）することで莫大な数の人間が勇者になった。
どうやって勇者になるのか、どうやって脳に作用する学習装置（インストーラー）が出来たか、という説明は置いておき、ともかく小さな島国は百年前の争いを境に名前から住人までほとんどが変わった。
もし、百年前の常識であれば殴られたあとに掴みかかって言い争う方がまだ子供らしいと思うかもしれない。ただ、学校に来ている子供全てが勇者である現在の世界にとっては人が吹き飛んだり、大人もショートしそうな思考回路を持つのもあくまで常識的である。
この世界に住んでいる九割以上の人間が機械から知識を与えられ、勇者であることを考えれば、当たり前のような光景であるのだ。
「てめえ全裸で土下座しろや！」
「んじゃあ、お前は全裸で逆立ちな！」
こんなノリはいつの時代にもない。あくまで二人の関係が――と書くと二人に向けられる視線が微笑ましいものではなくなりそうだが――少しおかしいだけだ。旧時代の高校生でもこんな全裸ノリはない。
「つーか威力高いんだって。僕のか弱い首が飛んだらどうすんだよ？」
蓮土は少し赤くなった首筋をさすりながらぼやく。
首が吹き飛ぶというのもありえない話ではない。普通の子供が五メートルも吹っ飛ぶといったら普通速度で走っている乗用車にぶつかったのと同じかそれ以上の衝撃である。ただ、ぶつかった人間もまた勇者ならそれはただの子供のお遊びだ。体重や体格は変わらずとも強固さは人間を軽く超えているのだから。
実際、大して効いていないのだろう。怒った理由もいつも通りだからというのもある。
蓮土は指の力を抜き、掴みかかった腕を外し向かい合う少年の名を呼ぶ。そこに怒りはなく、爽やかな挨拶だった。

「昴、おはよう」
「おはっよう蓮土！」
そこには二人の少年の笑顔。無邪気な笑顔だけはいつの時代も変わらなかった。

第一話（前書き）

少しごちゃごちゃしてしまいました。まとめきれないのは作者の腕でして……

もし、見づらいなどありましたらコメントしていただけると嬉しいです。

一応、小説を意識して書いておりますので（^＿^）／

第一話

そもそも勇者とはなにか？　そこか「早く教室いこうぜ、蓮土っ！」

元気いっぱいな昴に強引とも呼べる勢い引きつられ、教室の中へと入る。

ちなみに蓮土が語ろうとしたのは『そもそも勇者とはなにか？そこから語ろうと思う』と前回と議題が変わっただけである。

またも思考の邪魔をされたわけだが、今度は怒る前に教室に先に来ていた子供達におはようと言われてしまったので蓮土も大まかに全員へ挨拶を返す。同じクラスなのだから当然だが、全員が同い年である。

とはいえ、知識元の勇者によって体質も変わってくるために、十歳でありながら身長１７０センチメートルを超えるような男の子もいれば、そこまで伸びるのかと思うほど異様に髪の長い女の子もいるようなかなりバラバラな印象を受けるクラスだ。

蓮土と昴を見比べても、髪の色が蓮土は太陽の光を吸い込むような漆黒であるのに対して昴は東洋人とは思えないほど輝かしい金色の髪。他の子供達を見ても黄緑色や、赤色、目立つもので紫や三色混ざったものなど、髪の色だけでも違いが見える。

とはいえその程度の違いは子供達になんの影響も与えず――ここまで髪色が違っているのは、魔法によって染められた髪色のまま子供が出来た場合に遺伝子に影響が及ぼされたからではあるが――仲良く話している。

話の内容は先ほどまでの二人と同じで、哲学的な話しを繰り広げる子や、どう攻撃するのが一番早いのかなど、どちらにしろ子供らしくない光景である。

ゆとりではなく、百年前とは違う意味合いの詰め込み教育の弊害によるものか。それでも変わらないものはしっかりと子供たちの顔

にある。
　クラスの中に取り残されたように誰かを待っている少女が一人。少女は蓮土を見つけると同時に駆け寄ってくる。
「れ、レンド、君……おはよう」
　恥ずかしそうに顔を赤らめ、たどたどしく話しかける。蓮土も答えようとするがそこで昴が割り込む。
「おはっようリーナっち」
　目の前の女の子は突然現れた昴に驚き、後ずさる。そんな昴を押しのけながら蓮土も話しかけた。
「お前には挨拶してないぞ？　おはよう。リーナ」
「そ、そんな……」
「す、スバル君もおはよう」
　勝手に落ち込み、勝手に盛り上がる昴を無視し、二人がリーナと呼んだ子に目を向ける。
　オドオドとした喋り方やそのか弱そうな立ち振る舞いからおとなしい印象を受ける少女。髪は短く茶色でここの教室では珍しく普通に見えるが、実は一番珍しい存在だったりする。理由は二つ。
　彼女の頭に生えたもう二つの耳。いわゆる、獣耳と呼ばれるもの。
　もう一つは見た目ではなく名前。
　リーナ・北沢・ブリングス。異世界の獣人と現世の人間の間に産まれたハーフ。
　この国に帰化したハーフの半獣人。それがどれほど珍しいかは子供たちでもわかる。
　他にも、蓮土の前ではいつも頬を赤くしている。理由は年頃の少女らしく恋をしているからなのだが、蓮土がそれに気づくことはない。さっきから何度も蓮土と目を合わせようとしているが失敗。恥ずかしくてすぐに背けてしまうのもあるが、それ以前に蓮土の視線は獣耳へと注がれている。
「うぅ、どうしたんですか？」
「いやぁ、今日も可愛いなっと思って」

「ひぁい！？　そ、そ、そんなことないです！」
蓮土が気軽に言った褒め言葉で、ただでさえ赤い頬が顔全体に赤さを滲ませ、一気に真っ赤になってしまう。
ちなみに蓮土が漏らした言葉はリーナ本人ではなく、獣耳に対してである。そんなことは知らぬ少女はどこかにいってしまったかのように誰にも聞き取れないような小声で頭の整理にいっぱいである。
恋も時代に流されることなくあり続ける。
「いや～しかし異性を直視ってできないよな～」
「そうか？」
突然、なんの脈絡もなく喋りだした昴。
異性がどうとかそんなこと全く気にしそうにない豪快な性格だと思っていた昴からそんな言葉が聞けたことに驚く。少なくとも自分はなにも思わないので、余計にその驚きは大きかった。
しかし、次の発言でもう一度考えを改めることになる。
「この中にいつか俺と結婚して子供を作るかもしれない相手がいると思うとゾクゾクして直視なんてできるわけないじゃないか！！」
昴の周りが凍りついたように感じた。蓮土は大声で人間として終わってる以前に子供でそれ考えてるってどんだけ？　という内容を叫んだ男の子に向ける眼差しは光を失い、リーナは蓮土の後ろに隠れ、汚物を見るような眼で見つめる。
なぜか鼻息の荒い少年に、とりあえず話しかけることにした。
「……もう近付かないでくれ」
「性的な目で女の子を見ただけでそんなに！？」
「当たり前だろ」
「スバルさんって変態さんなんですね……」
「それこそ当たり前だ」
「こらっ、なに勝手に肯定してくれてんの？　そしてリーナちゃんもそんな何回も頷かないで！？　そもそも男ってのはムッツリかオープンの違いがあるかどうかでして、結局全員変態……って待って！？　そんな勇者お得意の気配を消して移動で俺から離れないでぇ

ぇぇぇぇ！！」
得意げに変態講座を開きだした昴から離れる二人。以前「真の男ってのはいっぱいの『い』を『お』に変えたらどうなる？　と質問されたときに頭の中で『おっぱお』と理解していながらわざと『おっぱい！！』と元気よく言える奴こそ真の男だと俺は思う」と力説してきたときは帰るまでずっと付きまとわれたことを思い出し、ゲンナリした。
ついてくる変態少年を無視し、だいたい真ん中に位置する自分の席に移動する。
移動中、否応なく自分の席の隣に座る人物を見つけた。
メガネをかけた如何にも優等生で、さらに詳しく言うのなら、冷静を気取ってうんちくなどを紹介するが、主人公のボケによって目が飛び出てレンズを何回も割るタイプの男の子がいた。
「いきなり僕の説明詳しすぎません！？　しかも嫌みが利きすぎて、僕の持つアイデンティティを全てへし折られたような気がするのですが……」
「なんのことだ？　お前なんて説明する必要性もないくらいモブキャラだろ？」
「ひどい？」
つっこみと同時に漫画のように目が飛び出てメガネを割るが、説明後ゆえに迫力は無い。
「僕に対して文章が厳しすぎやしませんか！？」
「良かったじゃないか。神の反逆者になれたんだから」
「かっこよく言ってますけど嫌われてるだけですよねっ、それ！」
このやり取りで蓮土達以外のクラスメイトも笑い出す。
「そんなことねえよ。なぁ、変態？」
「呼び名を変態にするな。それにメガネだって変態だもんな」
「勝手に話を変えないでください！！」
「勝手に変態にするのは良いのかよ……」
いろいろとおかしなところの多い登場人物達による話しは盛り上

がり、意外に長い授業までの時間は時計の針が壊れてしまったかのように早く流れた。
ひとしきりみんなで笑いあったあと、授業の始まりと楽しいお話の終わりを告げるチャイムが流れ始めた。
こんなときだけもっと時間があればと思う都合の良い考えは扉の開く音で閉ざされる。
入ってきたのは中年の男、歴史を担当する教師。通称田中太郎。
あまりに地味で普通過ぎて逆にレアと言える人物である。
太郎の話は置いておいて。
昔から変わることのないチャイムの音を目覚まし時計に目覚める者が一人。教室にもどこにもいないその姿を確認できるのは蓮土一人だけである。
蓮土は心の中に話しかける。別に比喩でもなく、そのまま自分の心に語りかける。そこに潜む、勇者に。
『おはよう、クロ』
『……あぁ、おはよう』
クロ、と呼ばれた存在は眠たそうに反応する。体を持たない存在に睡魔がいるのかどうか以前に睡眠が必要なのかどうかすらわからない。それでも、彼は寝るし感情もある。そして蓮土共にある。
大きなあくびと共に蓮土の目の前に人形のような大きさの男が現れる。女の子が喜びそうなデフォルメされた姿だが、幽霊のように肉体の無い存在である彼を見ることが出来るのは蓮土だけだ。
純白で、腰近くまで伸びた髪を見ると女性にしか見えない。眼つきがもう少しよければ正面から見ても女の人だと思ってしまうだろう。
彼は深紅の瞳を鋭く細め、蓮土の心に直接語りかける。
『俺様を目覚めさせたのはどこのどいつだ？』
『お前はどこの魔王様だよ。つーかいつのゲームだ』
初めての人間なら尻込みしそうなプレッシャーを気にせず、慣れたように軽口で返す。五年以上離れず共にいるのだから慣れない方

がおかしいし、そもそもぬいぐるみのような人間を怖がったりしない。
『さぁ？　百年前なんじゃない？』
――そんで俺は魔王じゃない勇者だ――彼はそう続けた。その言葉に誇りや信念を蓮土は感じた。
『つーかまだ授業はじまってもないじゃーん。だりぃ、マジダリィ』
『お前は勇者でも魔王でもねぇよ。ただのチンピラだよ』
激しく幻滅した蓮土は呆れたように心でつっこむ。ただ空中に浮かぶ彼と声なしとはいえ話すその姿は周りから少し注目されていた。
それに気付いた蓮土は赤くなる顔を隠すように机に伏した。
『にゃはは。馬鹿だなお前』
『お前が雰囲気を壊すから』
『ガキのくせに雰囲気とか気にしてんじゃねえよ。子供らしく馬鹿やってれば良いんだって』
『僕はあらゆる概念を超えた存在だからな』
『それは俺のセリフだけどな。あと答えになってない』
肉体を持たず、意思を持つ存在。人間と呼べるかどうかも微妙だが、そもそも百年前に世界まるごと概念が変わってしまっているのだから気にする必要もない。気にするべきなのは授業である。
『そういえば今日の授業は第一話らしく現在の世界についてとそれに伴う勇者のことをするらしいぞ』
「都合良すぎっ！？」
叫んだあげく立ちあがってしまった蓮土はクラス全員から奇異の視線を当てられ、大切なものを失ったような絶望感に浸されるように机にもう一度倒れ伏した。
蓮土自身なぜそんなことをしてしまったのかわからない。ただ体が勝手に反応しただけである。
メガネはそんなことはおかまいなしに質問してくる。
「ど、どうしたんですか？」
「ツッコミの練習だ」

「そこまで笑いにかけてらっしゃったんですか！？」
「いまから授業（チュートリアル）が始まるんだ。心して聞け」
「誰に言ってるんですか？」
苦しい言い訳に自分の口の中が苦くなる。
二つ目の疑問に答えることなく蓮土は誤魔化すように姿勢を正す。
それに合わさるように教室で喋る人はいなくなる。
全員がこちらを見ていることを田中は確認した。
授業の語り手は、静まった教室で語り始める。
一人のファンタジックな人生で１８０度変わった今の世界を。

第二話（前書き）

あまりうまく纏まりませんでしたので、いつか書きなおすかも。
時間かなりかかったのになぁ……

第二話

「春先。勇者とは何か答えろ」
語る、などと言っていたが、そこは授業だ。
例え、教科書がタブレットに代わり、今や脳内に教科書が保管されているような時代であっても質疑応答は必要不可欠である。
春先と呼ばれた少年は立ち上がり質問に答える。
「はい。勇者とは異世界に召喚され、与えられた使命を果たし、この世界に召還された人間、またはその人間の知識を有する人間を呼びます。但し、私たちのような知識を持っていても能力が不完全な人間は勇者の卵と呼ばれます。どんな人間でも召喚されれば勇者になれるので、誰にでもチャンスがありますね」
読者に優しい、というか完全に意識してるよね？　と思える素晴らしい解答を春先はしてくれた。
ちなみに彼の出番はもうない。
「現在の世界の状況について。メガネ、答えろ」
「先生までそう呼ぶのですか……」
なんて言いながらも立ち上がり答える準備をするメガネ。
「現在。日本は地球において鎖国と呼べる状態ですが、他の世界、つまり異世界との交流はあります。地球にある日本の土地は守護魔法陣によって他の大陸から近づけなくしています。そして異世界にある土地、つまり今、私達が過ごしてるここは始まりの勇者の召喚された土地であり、現勇者達の居住区となっています」
勇者の居住区。現在、地球とは理すら別の世界に国の土地を持つ日本。
つまり現在の日本は惑星一つ分の国土を誇る巨大国家となっているわけだ。
といっても理が違うために、魔法が使えるという利点の代わりに重力は地球より高く、人間以外に魔力を持つ生物は魔物と呼ばれる

狂暴な存在に手を焼かされたりとそこまで居住できる範囲は広くない。
さらに技術レベルもちょうど勇者の現れだした百年前程度の技術しかない。
とはいえそこまでの土地を保有しているのだから巨大と言って相応しい。
鎖国という現在の状況から鑑みてそこまで必要があるかはわからないが。
「なぜ鎖国したのか。昴、答えろ」
「ううぇっ！？　俺？　その……聞いてませんでした……」
『良くあったなぁ。あれ』
隣の人と授業中にも関わらず談笑をしていた昴は答えることが出来ず、項垂れる。
答えを知らないわけではない。むしろ知らないわけがない。
それに同意するクロ。
世間的にはいけないことだが、やはり授業を真面目に聞くより話している姿の方が子供らしく感じる。
『クロっておっさんぽいよな。らしさを求めるとか』
口には出さず、脳内で発した言葉だがクロには届く。クロだけ聞ける。
言いかえればクロの声は蓮土にしか届かない。
『これでも百年以上生きるおじさんなんでね』
そうか～、と納得してしまう蓮土だが実際には二十数年程度しか生きていない、というより知識の抽出時にまだ成人していなかったのだから現在で二十五歳程度といったところだろう。
だが、勇者になるための試練、異世界での経験があるなら精神的に老いてもおかしくない。
勇者は強さを表す飾りではないのだから。
だからこそ子供には子供らしさを求める。世界を変えてしまった人間として。

「蓮土。お前はわかるか？」
昴の尻拭いに蓮土が選ばれた。わかるか？　という質問も存外ちゃんと話を聞いていたのかという脅迫的質問のように聞こえる。
だが蓮土は誰とも話してはいなかったし、クロとの会話は昴があてられてからなので問題なく答えることが出来る。
「鎖国の理由は二つ。一つは日本独自の技術、『魔法』の隠蔽。そして百年前に起こった戦争が原因です。魔法は現在でも一般人には公開されず、勇者だけが使用可能です」
理由は簡単。魔法による犯罪を防ぐためだ。
魔法は軽く科学を超えていた。というより科学と合わさることによって危険が更に増す。
義務教育で習う程度の科学でもさまざまなことを習う。
分子や原子の仕組みを知っているだけでも魔法は随分強化されることがわかっている。
世界の仕組みをしれば知るほど魔法は鋭利になっていくのだ。
異世界では大抵の時代が中世よりしたの生活水準しか持ちえていないため安全――というには危険すぎる代物――だったが現代は常に見えない爆弾を持っているようなものだ。
例えば魔法によって発生させた電流で電線をショートさせればそれだけで一世帯まるごと停電、となるがそんなことといってしまえば風を操って電線を断ち切ろうが火で焼き切ってしまおうが一緒なのだろう。
例が間違いだった。
そもそも電線なんて切ろうと考える人間などいない。
本当に恐ろしかったのは力を手にした人間が暴走することだった。
二十一世紀初めの頃は問題が多く、国民は不満、不安が負担となりつつあった。
まだ国は大丈夫だとかこれからだとか希望的な言葉が発せられていたが、それでも絶望的だった。
政府はなにもしない、というわけではなくなにをしても否定され

た。
必死に政治家だって頑張っているのに誰も認めようとしないような状況だった。
そこで現れた力に頼るのはしょうがなかった。
それを隠そうとしたことをしょうがないと呼べるかはわからなかったけれど。
「戦争についても説明できるか？」
先生は蓮土にそのまま解説を頼む。別に怠惰なわけではなくそれが授業というだけだ。
知っていることを延々と聞き続けなければならないのは正直言って苦痛でさらに子供からしたら地獄以外のなにものでもないけれど。
「昴君が答えてくれるんじゃないんですか～？」
意地悪な笑みを浮かべ、蓮土は昴にパスする。笑みで分かるが決してさっきの失態――と呼べるほど大きくはないが――を挽回するために解答権を渡したわけではない。
「そうだな。昴、答え……」
先生の言葉は途中で止まる。視線の先には話しこそしていないが、思いっきり机に伏した金髪少年の姿が。
もちろんちょっとした時間で寝てしまった昴である。
「起きなよ、スバル君……」
斜め後ろの席に座るリーナが必死に、といっても間違いなく目を覚まさないパターンの小声で起こそうとするが全く起きる気配はない。
机の上で寝ていて体が痛くなったりしないのかな？　と、自分が先生に怒られる状況を作り出したにも関わらず考えている蓮土は案外大物かもしれない。
一度当てられたにも関わらず寝られる昴も大したものだ。
これで勇者になれるなら一世紀前の人間の殆どが勇者だったろう。
ともかく先生に醜態を晒している昴は怒られ起こされることになる。

「起きろ昴！」
「早起きは三文の得」
「ことわざ言いながら起きた奴初めて見た」
寝ぼけているのかよくわからないことを言いながら目を眠そうに開ける昴。
少し感心しながら呟く蓮土。
微妙に睡眠に関係することわざで気分を逆撫でされた先生。
その後、昴は廊下に立たされるといういよいよいつの時代かわからなくなってくるような罰を受けることになった。
そして話しの続き。
この世界をもっとも大きく変えた戦争のお話。
続いて蓮土はもう一度昴の尻拭い――半分以上自分の所為だが――であてられたので答えることになった。
「世界に超能力者が現れてから数年が経ってから突然ある国が狼煙を上げて他の国を攻めだしました。もっとも大きかったその国は超能力者の絶対数で他の国を圧倒していたので徐々に周りの国を吸収していきました。そこで小さな島国は勇者を出撃させ見事勝利しました。その後、その島国の周りには霧のようなものが発生し近づけなくなり、戦争に負けた国は分解、そして内戦なのかどうかすらわからないほど混沌とした争いの地になりました」
蓮土は何度も習った歴史を復唱する。
物語調になっており、国名などが隠されているのはあるお話からの抜粋だからである。
小さな島国は言わずもがな日本であり、他の国は分裂、吸収を繰り返したために名前はわからなくなってしまっているため。
正直言ってしまえばこの歴史はおかしなところだらけである。
たった数年で戦争を起こしたのも、超能力者の出現についても詳しく説明がされていない。
もっとも世界を動かした歴史でありながらもっともぼやけており、曖昧な歴史でもある。

ただ戦争は間違いなくあった。映像だってある。
映像でいうなら一番最初に軍隊が発射した砲弾のようなエネルギー体が超能力である。
魔法との違いは多彩性で、超能力は一人一つしかエネルギーを生み出せないのに対して、魔法は誰でも何種類も扱えエネルギーだけでなく物体などにも影響を与えることが出来る。
ただ世界を救うには十分な力だったのだろう。
エネルギー不足の問題を解消するためあらゆる国が研究に勤しんだ。
結果、戦争になったということだ。
百年以上も前の過去を詳しく知る人間はもうほとんどいないけれど。
ただ戦争だけはあった。
ファンタジックな救いの力で行われたリアルな殺し合いは確かにあったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4585x/

ブレイバーズ

2011年11月22日02時51分発行